

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

## 1. 研究課題

『広弘明集』に見る中国中世在家仏教

Lay Buddhism in medieval China, as seen from the Expanded collection of the propagation of light (Guang hongming ji)

## 2. 研究代表者氏名

船山 徹

FUNAYAMA, Toru

## 3. 研究期間

2024年4月-2027年3月(1年目)

## 4. 研究目的

『広弘明集』(664年成書)は、4世紀～7世紀前半(六朝・隋・初唐)の仏教諸文献を集める。本研究班は、『広弘明集』に収める在家信者(具体的には王侯貴族)が執筆した書物を取り上げ、在家者に共通する仏教に対する見方と接し方を、出家僧と対比しながら検討することを研究目的とする。

中国において仏教は様々な発展を遂げた。多くの仏書は「出家者」が書いたものだが、それだけにとどまらず、皇帝・皇族・知識人らの「在家者」も大きな役割を果たした。例えば、仏教と世俗社会の関係や、仏教書の文字表記と中国伝統文献(儒教・老荘・文学等)との連関は、出家者が書いた書物からは知り得ない、在家仏教の一面である。一方、在家者であるために参看できなかった仏教書もあったと考えられる。具体的には例えば、出家者の生活規則や罰則を記す『律』(ヴィナヤ)や出家者が書いた詳細な注釈書を在家者は手にとって読めたのか。また、在家信者が特に好んだ書物があったのか。現在に至るまで、これらの問いに対する確かな答えは今なお得られていない。本研究班は中国在家仏教史に対する新たな解釈の試みである。

The Expanded Collection of the Propagation of Light (Guang hongming ji) compiled in 664 CE, is a collection of short Buddhist texts from the fourth to the first half of the seventh centuries (i.e., the Six dynasties, Sui and early Tang periods). This research aims to conduct a close examination of the views and approaches of lay Buddhists (specifically royalty and aristocrats) to these texts, contrasting them with those of ordained monks.

Buddhism underwent various developments in China. While most Buddhist works were composed by "ordained monks," from another perspective, lay persons also played a

constructive role. In particular, the special features of the laity are discernible in the relationship between Buddhism and the secular world as well as the connection between Buddhist texts and non-Buddhist texts including Confucian and Daoist writings and other traditional literary works. On the other hand, it is highly possible that lay persons could not access certain types of texts such as the monastic codes (vinaya in Sanskrit) and in-depth exegetical and commentarial texts. Whether or not the laity had preferences for certain types of scriptures is an open question, and one which remains to be fully elucidated. This project attempts to shed new light on the actual history and nature of lay Buddhism in medieval China.

## 5. 本年度の研究実施状況

初年度である今年は、隔週金曜午後に各3時間、以下の通り、合計14回の会読研究班を開催し、文献解読基礎研究の基盤を構築した。(1) 沈約「懺悔文」・梁高祖「摩訶波若懺文」(担当者船山徹)、(2) 梁武帝「金剛般若懺文」・陳宣帝「勝天王般若懺文」(担当者船山徹)、(3) 陳文帝「妙法蓮華經懺文」・陳文帝「金光明懺文」(担当者魏藝)、(4) 陳文帝「大通方廣懺文」・陳文帝「虚空藏菩薩懺文」(担当者倉本尚徳)、(5) 陳文帝「方等陀羅尼齋懺文」・陳文帝「藥師齋懺文」(担当者河上麻由子)、(6) 陳文帝「娑羅齋懺文」・陳文帝「無礙會捨身懺文」(担当者稲本泰生)、(7) 梁簡文帝「謝勅爲建涅槃懺啓」・梁簡文「悔高慢文」(担当者古勝隆一)、(8) 江總文「群臣請隋陳武帝懺文」(担当者船山徹)、(9) 沈約「南齊南郡王捨身疏」、(10) 梁簡文「四月八日度人出家願文」(担当者トマス・ニューホール)、(11) 梁簡文帝「八關齋制序」(担当者大谷由香)、(12) 昭明太子「令旨解法身義〈并問答〉」(担当者魏藝)、(13) 昭明太子「令旨解法身義〈并問答〉」(担当者魏藝)、(14) 総括と来年日程(担当者船山徹)

## 6. 本年度の研究実施内容

- 2024.04.19 原典資料の精読を通じて前近代中国在家者の仏教観を知る 沈約「懺悔文」と梁高祖「摩訶波若懺文」の基盤研究(校本・現代日本語訳・語注) 発表者 船山徹
- 2024.05.19 原典資料の精読を通じて前近代中国在家者の仏教観を知る 梁武帝「金剛般若懺文」と陳宣帝「勝天王般若懺文」の基盤研究(校本・現代日本語訳・語注) 発表者 船山徹
- 2024.06.07 原典資料の精読を通じて前近代中国在家者の仏教観を知る 陳文帝「妙法蓮華經懺文」と「金光明懺文」の基盤研究(校本・現代日本語訳・語注) 発表者 魏藝 龍谷大学文学部非常勤講師
- 2024.06.21 原典資料の精読を通じて前近代中国在家者の仏教観を知る 陳文帝「大通方廣懺文」と「虚空藏菩薩懺文」の基盤研究(校本・現代日本語訳・語注) 発表者 倉本尚徳

- 2024.07.05 原典資料の精読を通じて前近代中国在家者の仏教観を知る 陳文帝「方等陀羅尼齋懺文」と「薬師齋懺文」の基盤研究（校本・現代日本語訳・語注） 発表者 河上麻由子 大阪大学大学院
- 2024.07.19 原典資料の精読を通じて前近代中国在家者の仏教観を知る 陳文帝「娑羅齋懺文」と「無礙會捨身懺文」の基盤研究（校本・現代日本語訳・語注） 発表者 稲本泰生
- 2024.09.20 原典資料の精読を通じて前近代中国在家者の仏教観を知る 梁簡文帝「謝勅爲建涅槃懺啓」と「悔高慢文」の基盤研究（校本・現代日本語訳・語注） 発表者 古勝龍一
- 2024.10.04 原典資料の精読を通じて前近代中国在家者の仏教観を知る 江總文「群臣請隋陳武帝懺文」の基盤研究（校本・現代日本語訳・語注） 発表者 船山徹
- 2024.10.18 原典資料の精読を通じて前近代中国在家者の仏教観を知る 沈約「南齊南郡王捨身疏」の基盤研究（校本・現代日本語訳・語注） 発表者 出席班員
- 2024.11.15 原典資料の精読を通じて前近代中国在家者の仏教観を知る 梁簡文帝「四月八日度人出家願文」の基盤研究（校本・現代日本語訳・語注） 発表者 ニューホール、トマス
- 2024.12.06 原典資料の精読を通じて前近代中国在家者の仏教観を知る 梁簡文帝「八關齋制序」の基盤研究（校本・現代日本語訳・語注） 発表者 大谷由佳 本研究所所属白眉センター特定准教授
- 2025.01.17 原典資料の精読を通じて前近代中国在家者の仏教観を知る 昭明太子「令旨解法身義〈并問答〉」の基盤研究（校本・現代日本語訳・語注） 発表者 魏藝 龍谷大学文学部非常勤講師
- 2025.02.21 原典資料の精読を通じて前近代中国在家者の仏教観を知る 昭明太子「令旨解法身義〈并問答〉」の基盤研究（校本・現代日本語訳・語注） 発表者 魏藝 龍谷大学文学部非常勤講師
- 2025.03.07 原典資料の精読を通じて前近代中国在家者の仏教観を知る 本年度会読箇所の整理と次年度計画 発表者 船山徹

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

船山徹「漢譯できない語をどうするか：唐の玄奘に託された「五不翻」説の再検討」、『東方學報』京都 99 冊、2024 年 12 月、総 61 ページ

## 8. 研究班員

所内

船山徹、稲本泰生、ウィッテルン、クリスティアン、古勝隆一、倉本尚徳、中西竜也、石垣章子、山本茂、蘭原、ニューホール、トマス

慶昭蓉(白眉センター)、大谷由佳(白眉センター)、中村慎之介(文学研究科)

河上麻由子(大阪大学大学院人文学研究科)、李乃琦(名古屋大学文学研究科)、魏藝(龍谷大学文学部)、中西俊英(京都女子大学文学部)、村田みお(近畿大学国際学部)、久永昂央(東大寺ミュージアム)、趙ウニル(梨花女子大学校)

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
人文研所属 (内女性)	1	12 (4)	3 (2)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	98 (38)	38 (18)	6 (6)	0 (0)	0 (0)
京大内 (人文研を除く) (内女性)	1	1 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	6 (0)	0 (0)	0 (0)	6 (0)	0 (0)
国立大学 (内女性)	2	2 (2)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	25 (25)	14 (14)	13 (13)	0 (0)	0 (0)
公立大学 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
私立大学 (内女性)	3	3 (2)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	17 (13)	13 (13)	0 (0)	14 (14)	0 (0)
大学共同利用機関法人 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
民間機関 (内女性)	1	1 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (0)	0 (0)	4 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関 (内女性)	1	1 (1)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	0 (0)
その他 ※ (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	9	20 (9)	6 (5)	5 (4)	2 (1)	0 (0)	151 (77)	67 (47)	24 (20)	20 (14)	0 (0)

※「その他」の区分受入がある場合  
 具体的な所属等名称を記載：例）高校教員  
 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	『東方學報』京都 99 冊	1	2024.12	漢譯できない語をどうするか:唐の玄奘に託された「五不翻」説の再検討	船山徹

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

なし

12. 博士学位を取得した学生の数

なし

13. 次年度の研究実施計画

2 年目である次年度は、本年同様の形式で、次の通り合計 15 回の会読研究班を開催する。

- (1) 昭明太子「令旨解二諦義〈并問答〉」(担当者船山徹)、(2) 同 (担当者中西俊英)、(3) 同 (担当者蘭原)、(4) 同 (担当者倉本尚徳)、(5) 謝靈運「辯宗論」(担当者魏藝)、(6) 同 (未定担当者)、(7) 同 (担当者大谷由佳)、(8) 同 (担当者魏藝)、(9) 同 (未

定担当者)、(10) 王邵「舍利感應記」(担当者船山徹)、(11) 同(未定担当者)、(12) 同(未定担当者)、(13) 同(担当者稲本泰生)、(14) 同(担当者河上麻由子)、(15) 以上の再検討と補足(担当者船山徹)。また、このほか、初年度会読箇所在校本・現代語訳・語注の最終稿を班長が作成し、班員諸氏の合意を得て、『東方學報』京都 100 冊に投稿する予定である。

#### 14. 研究成果公表計画および今後の展開等

初年度会読箇所在校本・現代語訳・語注の最終稿を班長が作成し、班員諸氏の合意を得て、『東方學報』京都 101 冊に投稿する予定である。3 年目の最終年度 2026 年にも同様の校本・語注を『東方學報』に投稿する予定である。